別紙２

審査の結果の要旨

氏名　二藤　京

本論文「『日本書紀纂疏』の〈日本書紀〉」は、一条兼良の『日本書紀纂疏』（以下『纂疏』とする）が、どのように『日本書紀』を成り立たせたかということを追究したものである。『纂疏』は、『日本書紀』の注釈として扱われるのが普通であるが、現在あまり高い評価は与えられてはいない。中世的な解釈であって見るべきところがないとするのが一般的である。しかし、中世の理解を集約的かつ体系的に示すものとして、古典として生き続けてきた『日本書紀』の歴史のなかに、『纂疏』の位置づけがもとめられる。現在にいたるまで『日本書紀』は不変であり続けてきたわけではなく、その時代時代に意味を更新してあったものとして見るべきである。そうした見地から、中世において『日本書紀』がいかにあったかということを、『纂疏』においてとらえねばならない。本論文は、この課題をひき受けたものであり、「『日本書紀纂疏』の〈日本書紀〉」という題目に、主題は端的にあらわされている。

『纂疏』の著者、一条兼良（一四〇二～一四八一）は、室町時代に、五百年来の学者と評され、故実・歌学・古典学等多方面にその才を発揮した。『纂疏』は、康正年間（一四五五～一四五七）に宮中でおこなわれた講義に際して成された、兼良の壮年期の著作と認められる。その機軸は、「三教一致」、つまり、儒教・仏教・神道はもとより一つのものだとする立場から、中国の典籍・仏典と一つにして『日本書紀』神代巻を解釈することにある。仏典の注釈にならった体裁でなされ、神代巻の一言一句に解釈を施した劃期的な著作であり、後代に与えた影響もきわめて大きいものがある。

しかし、その中世的時代性のゆえに顧みられることが少なく、思想大系のようなシリーズにも収められることがないままにきた。これに対して、本論文は、『纂疏』を現在のわたしたちの見方で裁断して切り捨てるのではなく、中世における『日本書紀』のありようをとらえるために不可避のものとして、テキスト全体を読み解くことを試みたのである。思想史や国文学においていままでなされてこなかった作業であり、未開の領域ともいえるところに、果敢に挑戦したことは高く評価されてよい。そして、本論文によって、『纂疏』は、元来の『日本書紀』を変換し、新たな〈日本書紀〉を成り立たせたものであるという認識が明確にされたことは、古典としての『日本書紀』把握にとって大きな意義を有すると評価される。

本論文は、第一章「はじまりの物語」、第二章「世界像の再構成」、第三章「現実世界の確証」、第四章「「三種神器」説の体系化」、第五章「「系譜」の保証」を本論とし、序章、終章とを加えた全七章から構成される。

序章は、『纂疏』の体裁が、「科文」という、仏典の注釈のスタイルにならったものであ

ることを明らかにするとともに、「三教一致」という『纂疏』の立場に沿ったアプローチの必要性を確認し、第一章以下は、『纂疏』が『日本書紀』を十一段に分けて注解を加えたところを逐って、そのアプローチを具体化する。第一章は、『日本書紀』冒頭部の語る世界生成を『纂疏』がどのように読むかを分析し、その世界のはじまりの物語として読まれたものは、「本書」（『日本書紀』が神代巻において中心として立てた本文）・「一書」（「本書」に対して注として載せた異伝）を、一つのものとして組み立て直すことによって成り立つ、元来の『日本書紀』の構成のありようを変換したテキスト理解であることを明らかにした。第二章は、『纂疏』が、『日本書紀』の世界を、元来の世界像を離れて、仏典の語る世界と合致するのを確かめることを論じる。第三章は、天照大神について、『纂疏』の注解を通じて、元来の『日本書紀』が「日神」としてのみ意味づけていたのとは違う、新たな像が作り出されてしまうことを析出したものであり、第四、五章は、その天照大神の裔であることによって天皇が保証されるのを証すべく、神器と系譜とによって正統性を確認してゆく『纂疏』の言説が、やはり『日本書紀』を変換して成されることを追尋したものである。終章は、『日本書紀』の更新という、『纂疏』の本質と、時代のなかに生きる古典という点からそれを見るべきこととを再確認する。なお、付録として、引用仏典索引、本文分析構成図の二を添える。

こうして、『日本書紀』の体系的再構築――新たなテキストとしての変換・再生――を果たしたものとして、『纂疏』の本質を照らし出したのが本論文である。従来『纂疏』には注釈テキストもなく、まともに読まれてこなかったというほかないのに対して、はじめて、全面的なテキスト理解を試みたことは特筆に値する。果敢な挑戦という所以であり、それが留学生の課程博士論文として成されたことも特記されねばならない。本論文の意義は、何より、『纂疏』の本質把握と、正当な評価のための新たな開拓という点にある。きわめて低くしか評価されてこなかった『纂疏』が正当に位置づけられ、古典としての『日本書紀』の歴史にとってはじめて正当な認識が拓かれたのである。『日本書紀』自体の研究ではないが、もっともよく知られた古典である『日本書紀』への大きな寄与というべきである。付録も、『纂疏』理解にとって、今後に益するところ多大な試みとして評価される。

無論、新しい開拓であるだけ、のこされた問題も少なくない。テーマ設定がより明確になるように論述されるべきだというのもその一つである。問題設定自体が、新しい問題提起なのだという点からすれば、当然工夫があるべきところであった。また、これも小さくない問題として、『日本書紀』そのものについて、自分のことばで語りうるところが少なすぎるのではないかということが指摘された。さらに、兼良の仏教思想に関しても、一般的に仏教というだけでなく、天台・南都という環境についてもっと具体的に見る必要もあるのではないか、等々、より深めてゆかねばならない問題がなお多いということや、文章表現の未熟さも、審査委員から指摘された。しかし、そうした欠点は、本論文の価値を何ら損なうものではないということが委員の一致する評価であった。また、この研究が、今

後の研鑽によってさらに発展させられることが学界にとって大きな寄与となるという点でも一致した。

　したがって、本審査委員会は、全員一致をもって、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

–